

これならわかるぜ！

ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

【第1回】使役

「ためぐち漢文・基本構造編」をマスターした諸君、いよいよお待ちせしました、句式編の講義を始めるぞ。

つまり使役とか受身とか、疑問とか反語とか、そういうやつだな。

なに？最初からそれを教えてほしかったって？

バカ言ってるんじゃないよ！ 基本構造も理解せずに、AとかBとか記号使ってパターンを丸覚えして何の意味がある！

基本構造がわかってはじめて、なんでこういう形になるのかわかるんだ。

急がば回れってやつだったんだよ、いいかい？

それじゃ、まず第1回の講義は使役の形からだ。

1. 使役動詞「使」「令」を用いる兼語文

学校で習う、いわゆる使役の形の代表格が、使役動詞を用いる兼語文だ。

覚えるかい？ 基本構造編でもう教えたよな？

ほら、本来は2文からなる文で、前の文の目的語が後の文の主語になる文だよ。

王使_二人学_レ之。

▼王人をして之を学ばしむ。

▽王が人にこれを学ばせる。

まあ使役の典型的な形なんで、見たことがあるだろう？

学校の先生なんかは、これを「A使_二B_レC_セ」の形で「AがBにCさせる」って意味だ、覚えろ！ってやるわけなんだが、なんでこれがそういう意味になるんだっけ？

なんでこの語順？

そもそもこの形って、どれが主語で、どれが述語で、どれが目的語だっけ？

文の成分をどう説明するんだっけ？

全部、基本構造編の講座で説明済みだぞ。

なんもわからんと丸覚えしたってダメだぞ！

今回、使役の形のトップバッターということで、使役の兼語文の復習から始めよう。

この形は、本来2つの文からなるんだったよね。

主語 述語 目的語
王 使_ス 学_フ

(王が人を使役する。)

主語 述語 目的語
人 学_フ 之_ヲ

(人がこれを学ぶ。)

「使」は、訓読では「しむ」と読むけど、「使役する」という意味の動詞なんだ。

助動詞じゃないぜ、それは日本語の話。

中国語では、れつきとした動詞なんだよ。

前文で「王が人を使役する」と述べて、その目的語「人」が後の文の主語になって、「人がこれを学ぶ」と述べる。

つまりわかりやすく続けて言うと、「王が人を使役し、その使役される人がこれを学ぶ」となる。

だから結果的に「王が人にこれを学ばせる」という意味になるわけさ。

ここで「人」は前の文の目的語で、後の文の主語を兼ねている、だから兼語っていうんだったよね。

兼語文ってのは、2文が兼語を介して1文になったものだったろ？

ところで、ここでとても大事なことがわかるな？

右の例文を見ればわかるように、使役される対象は、必ず使役動詞の直下に置かれるってことさ。

言い換えれば「くフシテ」と読む語は必ず使役動詞の直下の名詞だったこと。

当たり前だろ？ 前の文の目的語なんだから。

だから、たとえば「王使学之」だったら、使役動詞「使」の直下には使役対象になり得る名詞が存在しないから、「くフシテ」と読む語は省略されていることになるんだ。

この使役の句式は、入試や実力テストで最もよく出題される形の1つで、白文を読ませる問題も多い。

「くフシテ」と読む語の位置と有無はそうやって見分けるんだぜ。

ところで、後の「ポイント！」でまとめてあるように、使役の形をAとかBとか記号を使って一般化する
と、「A 使_ム B 学_フ C 之_ヲ」ってなる。

これを君たちは、「A BをしてCせしむ」って覚えるんだが、この「Cせしむ」ってのは、「Cす」というサ変動詞の未然形「Cせ」に「しむ」をつけてるんだよ。

つまり、Cという動詞の未然形に「しむ」を接続させるんですよって意味。

Cはいつもサ変動詞とは限らないというか、そうでないことの方が多いわけだから、いつも「せしむ」となるわけじゃない。

それなのに、実に多いんだ、何がなんでも「せしむ」を付けて読む奴らが。

たとえば、「太郎使花子歌」の読み方を書き下し文で示せという問題だったら、なんて読む？

「太郎花子をして歌はせしむ」だって？ ほら、それだよ。

日本語の「歌ふ」は四段活用の動詞だろ？

その未然形は「歌は」じゃないか！

つまり、「歌はしむ」だよ！ 「歌はせしむ」じゃないんだよ！

これって、漢文じゃない、日本語の問題だぜ！

君ら、日本語ぐらいちゃんと使いこなせよ！

◎ポイント……使役の基本形は兼語文

A 使_二B_一C_。

▼A BをしてCせしむ。

▽AがBにCさせる。(↑「AがBを使役し、使役されるBが実際にCする」から)

・使役対象B(「ヨシテ」をつけて読む語)は、必ず使役動詞「使」の直下にある名詞。なければ省略されている。

「使」と同様に用いられる使役動詞には、「令」「俾」がある。
特に「令」はよく用いられるぞ。

吾_レ令_二人_一求_レ之_。

▼吾_レ人_一をして之_一を求めしむ。

▽私が人にこれを探させる。

これも「吾_レ令_二人_一」(私が人を使役する)と「人_レ求_レ之_。」(人がこれを探す)の2文が、兼語「人」を介して1文になったものさ。

つまり、「私が人を使役し、その使役される人がこれを探す」という構造から、「私が人にこれを探させる」という意味になるんだ。

「使」の場合と同じだね。

この「使」「令」は、どちらも動詞なんだが、後で述べる「命めい」「遣ひん」(命令する)とか「遣ひん」(派遣する)などの動詞と比べると、具体的な使役動作がアバウトで、一般に「使役する」という意味で用いられるのが普通だよ。

そういう意味では「しむ」と訓読するのは、訓読が日本語訳だって観点からは理にかなってるともいえるんだな。

ところで、「使」「令」を「しむ」と読むことは、日本語の助動詞として読んだということ、つまり書き下し文にするときには「使む」「令む」ではなくて、「しむ」と平仮名にしなきゃならんよ。書き下し文のきまりというか、習慣であって、古典中国語とは何の関係もないけどな。

2. 使役動詞「命メ」「勸ム」「遣ハス」などを用いる兼語文

巷ちまたの参考書なんかでは、使役の形を「使役の助字を用いる形」と「行為の結果使役で読む形」なんて分けてることが多いね。

これ、実はどちらも同じなんだよ。

今から説明するのは、そのいわゆる「行為の結果使役で読む形」なんだが、前の「使」「令」と変わんない。

よく聞けよ、そしたらそれがなぜだかよくわかるから。

武帝崇ツ飾シ仏ツ寺ヨ、多ク命シテ僧シ繇ニ画カシム之ニ。

▼武帝ふてい仏ぶつ寺じを崇すう飾しよくし、多おほく僧そう繇えうに命めいじて之これに画えがかしむ。

▽武帝は仏寺を飾り立て、多く僧繇に命じてこれ(＝仏寺)に絵を描かせた。

この使役の形も次のように兼語文として説明できる。

武帝主語 命述語 僧繇目的語。
(武帝が僧繇に命令する。)

僧繇主語 画述語 之目的語。
(僧繇がこれに描く。)

こうして分解してみると、使役動詞「命メ」を用いたこの形も、前の「使」や「令」を用いる形と全く同じなんだということがよくわかるだろっ？

つまり、前文の目的語「僧繇」が後文の主語を兼ねて、「武帝が僧繇に命令し、命令された僧繇がこれに

絵を描く」という構造になっているわけだ。

同じ構造なのに、「使」を用いる形と違って見えるのはなぜ？

そう、察しのいい諸君はもうわかったよな？

使役動詞を日本語の「しむ」と読むか、「命ず」と動詞として読むかで、まるで違った形に見えるだけなんだ。

「命」自体を「しむ」と読まずに「命じて」と読んだ結果、使役対象に「くさせる」ことになるから、最後に「しむ」を補って訓読しているんだ。

だから、たとえば、「命」を「令」に代えてみようか？

武帝令_ム僧繇_ニ画_ニ之_ノ。

ほら、前と同じになっちゃうだろ？

つまり、「使」「令」を用いる形も、「命_ス」を用いる形も、構造的には全く同じなんだよ。

違うところがあるとすれば、さっき述べたように、「使」「令」が「使役する」というアバウトな意味の動詞なのに対して、使役動詞「命_ス」は「命令する」という具体的な意味を持っているという点だな。

ところで、この例文には、私的にちよつとしたびっくりしたエピソードがあるんだ。

ずつと前に、高校2年生の女の子が質問してきたんだよ。

「先生、この『武帝令_ニ僧繇_ニ画_ニ之_ノ』の最後の『之』の指示内容って何ですか？ 今習ってる授業で

は『武帝は僧繇に命令して彼に絵を描かせた』と訳して、『之』の指示内容は『僧繇』と説明されたんですが、私は違うと思うんです。だって、これ兼語文ですよ？」ってさ。

この生徒、1年の時には直接教えてたんだが、2年では違う先生に習ってたってわけ。

なるほど、「僧繇に命じて之に画かしむ」という日本語だけ見れば、「僧繇に命令して彼に絵を描かせるとも解せるんだな。

でも、聡明な諸君は、女の子がなぜ違うと思ったのか、もうわかっただろ？

だって、兼語文の後文「僧繇_ノ画_ニ之_ノ」は「僧繇がこれに描く」という意味だけ。

もし「之」が僧繇を指すんなら、僧繇が僧繇に描くことになっちゃうぜ、そんなわけないだろ？

仏寺に描いたんだよ。

漢文を訓読という日本語で理解しようとする、この先生のような間違いをおかす。

女の子は先生より漢文の構造がわかってたってことだな。

さっき、びっくりしたエピソードと言ったのは、その生徒が自力でそこまで理解して、先生の間違いに気づいたってことが、もうほんとにびっくりだったんだよ。

漢文を構造で理解すると、そこまでわかるんだよ。

みんなも見習うといいね。

「命」の他にも「勸」(勧める)、「遣」(遣わす・派遣する)などの動詞がこの兼語文の構造をとる。たとえば次の例。

亜父勸項羽撃沛公。

▼あ 父は 項羽に 勸めて沛公を 撃たしむ。

▽ 亜父(＝范増)が項羽に勸めて沛公を攻撃させる。

齊遣兵攻魯。

▼せい 兵を 遣はし魯を 攻めしむ。

▽ 齊の国が兵を派遣して魯の国を攻撃させた。

な？ みんな同じ構造だろ？

◎ポイント!…よくある「行為の結果使役で読む形」も、「使」を用いる形と同じ兼語文

A 命 B C

▼A Bに命じてCせしむ。

▽AがBに命令してCさせる。

↓「AがBに命令し、命令されるBが実際にCする」の意。

A 勸 B C

▼A Bに勧めてCせしむ。

▽AがBに勧めてCさせる。

↓「AがBに勧め、勧められるBが実際にCする」の意。

A 遣 B C

▼A Bを遣はしCせしむ。

▽AがBを派遣してCさせる。

↓「AがBを派遣し、派遣されるBが実際にCする」の意。

3. 使役を表す二重目的語の文（他動詞の使用用法）

二重目的語の文って覚えてるかい？

ほら、「項梁教_レ籍_二兵法_一」（項梁が項籍に兵法を教える）みたいに、述語が2つ目的語をとって、次の形をとる文だよ。

誰に

誰に

何を

述語 + 間接目的語 + 直接目的語

この形式が使役を表すことがあるんだ。

たとえば、「飲_ム」って動詞は何かを飲むって意味だろ？

だから普通は後に目的語を1つとって、「飲水」なら、水を飲むって意味になる。

「飲_レ水_ヲ」って読むわけだ。

この「水」は直接目的語だ。

これを「基本構造編」の講座では、他動性の目的語って説明したよね？ 覚えてるかい？

さて、「飲_レ水_ヲ」に、もう1つ「誰に（何に）」という対象を表す目的語をとって、たとえば「飲_レ牛_ヲ水_ニ」になると、「牛に水を飲ませる。」という意味になる。

この「牛」が間接目的語。

同じく「基本構造編」では、依拠性の目的語って説明した奴だ。

この時の語順が大事だぜ。

先に間接目的語（牛）、後に直接目的語（水）の順だ。

晋侯飲_レ趙盾酒_ヲ

▼晋侯_シ趙盾_ニ酒_ヲ飲_{マシ}ム。

▽晋侯が趙盾に酒を飲ませた。

この例も「晋侯飲酒」なら、「晋侯が酒を飲む」って意味だが、もう1つ間接目的語「趙盾」をとることで、「飲」が「飲む」ではなく「飲ませる」という使役の意味を帯びるんだ。

こんなふうにもともと使役の意味のない語が、何らかの事情で使役の意味をもつ動詞になることを「使役動詞」っていう。

「使役動詞になる用法って意味だぜ。」

この使動用法をとる他動詞には、他に「負」↓「負」↓「生」↓「生」↓「生」↓「生」などがある。

寧許以負秦曲。

▼寧ろ許して以て秦に曲を負はしめん。

▽（秦の要求を）認めて秦に非を負わせる方がよい。

無生民心。

▼民に心を生ぜしむる無かれ。

▽人民に（疑いの）心を起こさせずにはいけない。

この3つの述語動詞の後の目的語が、みんな「誰に」という間接目的語が先になつてること確認してくれよ。

この用法を、漢文の参考書なんかでは「文脈から使役に読む形」なんて説明してあることがあるんだが、違うんだぜ、ちゃんと語法的に説明がつく形なんだよ。

◎ポイント……他動詞「飲」「負」「生」が二つ目的語をとる時は、人物目的語＋事物目的語の順。
…「誰に」という目的語をとることで使動用法になる。

A 飲 B C

▼AがBにCを飲ましむ。

▽AがBにCを飲ませる。

A 負 B C

▼AがBにCを負はしむ。

▽AがBにCを負わせる。

A 生 B C

▼AがBにCを生ぜしむ。

▽AがBにCを生じさせる。

4. 名詞・形容詞・自動詞の使動用法

使動用法は、他動詞以外にも名詞や形容詞、自動詞なんかでも起こる。

たとえば、「傳つた」ってのは「補佐役」という意味の名詞なんだが、後に「王子」という目的語をとれば、「補佐役にさせる」という意味の使役動詞に活用して、「傳つた王子を」(王子に対して補佐役にさせる)↓王子の補佐役にさせる)になる。

これは名詞の使動用法だ。

「強つよ」は「強い」って意味の形容詞だろ？

それが「兵へい」って目的語をとれば、「強つよくさせる」という意味の使役動詞に活用する。

「強つよ兵へい」(兵を強つよくさせる)だ。

一般には「強つよ兵へい」って読まれてるけど、でも、要するに「兵を強つよくさせる」ってことじゃないか。

「富国強兵」って言葉があるだろ？

「国を富ませ兵を強つよくす」なんて読むからなかなか気づかないんだが、本当は形容詞「富と」(豊かである)、「強つよ」(強い)が名詞を目的語にとって動詞に活用した使動用法になってるんだぜ。

最後に自動詞の例。

たとえば「死し」は、もちろん「死ぬ」って意味の自動詞なんだが、後に「誰たれを」にあたる目的語をとると、他動詞のように働いて、使動用法になる。

「死し之を」(これを死しなせる)になるわけだが、これなんかも「死し之を」なんて読んじゃうから、使動用法だって、なかなか気づきにくいんだよなあ。

「文脈から使役に読む形」のように、使役に限らず「文脈からくする形」って、よくあるよな。

もちろん中には、ほんとに文脈から判断するしか方法がないことだってあるんだけど、実はちゃんと手がかりがあつて語法的に説明できるのに、「文脈から」で済ましちゃうことが実に多いんだよ。

特に受験用の参考書とか予備校とか、もちろん学校の授業なんかでもな。

本当のところ、語法がわかってないからなんだろうけど、あるんだぜ、手がかり。

君らは「文脈から」でごまかさずに、ちゃんと理解しような、うん。

◎ポイント……本来目的語をとらない名詞や形容詞、自動詞が後に目的語をとる時、使役動詞に活用して使役の意味を表すことがある。これも使動用法である。

今回の講義は「受身」の形だ、「使役の形」、ちゃんと復習しとけよ。